

ので、幼虫のように若い葉に集中することはない。真夏の強烈な直射日光下ではかくれることもあるが、普段は葉の表にいる。このようなことから生息数を知る方法として直接数えることにし、2回の調査でほぼ同数の数値を得た。したがって直接数える方法の正確度はかなり高いと考えた。

つぎにマーク法を採用したのは成虫の発生が年1回で羽化期が比較的一斉であること、寿命が1月以上とながいがいこと、移動が少ないことなど、条件が整っていることから割合に簡単な計算で密度推定が可能とみたからであった。

どちらも自信たっぶりの数値であるが、今一度ピンカズラの藪での生息状況を振り返ってみて気掛かりなことがあった。地面近くの葉は食い尽くされ、目の高さの葉もかなり食害されていたが、頂上部分は残されていた。成虫は葉の表面にいることが多いので下から見上げても見つからない。餌となる葉の多く残されていた樹冠部を直接法では見過ごしていた。このように考えればマーク法で得られた2,000匹が実数に近いのではなかろうか。

この調査が7月上旬で早すぎではないかと思われるかも知れないが、1998年の夏の到来が早く、多くの動植物の生育が促進されていたので、本種も羽化が例年よりかなり早いと予測していた。7月1日には成虫の死体を数個体見たことから、羽化の最盛期が到来していると判断して調査を実施した。

これまでに本種が多発したことがあるだろうか。高橋寿郎氏のキベリハムシに関する文献目録を探したら、横山光男氏が1937年に報告していた。高橋氏の添え書きに、六甲山で一人で二百数十採集したという記録、本文は後に表現がオーバーであると指摘されたが、その当時多くいたことは事実であると書いておられる。今回の多発を見た現在では決してオーバーとは思わないが、キベリハムシを求めて六甲山をさまよった経験の持ち主ならば一度に二百匹はとてども信じられる数ではなかったのは無理からぬことであった。高橋氏はさらに本誌第25巻2号に「キベリハムシが初めて日本に記録されたころの思い出」と題して寄稿され、そのなかに上記のことがもう少し詳しく、多発現象は六甲山の全域に及び、とくに鳥原水源地や東六甲で多産したと述べておられる。これらの記録から昭和12年に多発のピークが訪れたことが推察される。

日本に侵入した昆虫の多くは、爆発的な多発と急

速な分布拡大があった。しかし本種はこれまで激発することも、急速な分布の拡大もなかったので、活力に乏しい例外の侵入昆虫と考えられてきた。

今回の本種が多発現象は、害虫にリストアップされているハムシ類の激発現象と類似点が多く、条件が整えば爆発的な大発生の可能性を示している。今回私たちが見た多発は、再度山の局地的なものなのか、以前のように六甲山の全域にわたる現象なのかは確認できないが、決して活力に乏しい種類ではないことだけは言えよう。なお前回の多発生は1937年を最後にして翌年には劇的とも言える急速な密度減少がおきている。高橋氏は1938年7月の阪神大水害を原因とされているが、私たちは増えすぎた動物に共通な密度の崩壊現象と見ている。今後再度山のキベリハムシがどのような経過をたどるのか観察を続けるつもりである。

(YAMAGUCHI FUKUO 神戸市須磨区神の谷3丁目6-4)
(KONDO SHINICHI 神戸市西区岩岡町岩岡 619-57)

高取山にメスアカムラサキが飛来 山口福男

神戸市内で久しぶりにメスアカムラサキが観察されたので報告する。

1998年8月に笹倉 智氏から写真撮影された昆虫の同定を求められたが、その中に20枚以上ものメスアカムラサキの姿があった。すべて同一の個体で新鮮なオスであった。笹倉氏によると撮影地は高取山の山頂付近(神戸市長田区高取町一須磨区妙法寺の境界付近)で、1998年7月30日から8月4日まで連日観察出来たそうである。

笹倉氏はバードウォッチャーで昆虫マニアなことが幸いして、この個体が同一場所に6日も滞留していることが観察出来た。私などであればたどろに捕まえて標本にしてしまったであろう。今回のメスであれば二次発生の可能性が考えられるところであった。

(YAMAGUCHI FUKUO 神戸市須磨区神の谷3丁目6-4)